# Girl's Project
# プラン一般プロジェクト
# 緊急・復興支援
# 報告書

子どもと築く、未来のしくみ

Plan
プラン・ジャパン

Autumn 2014

2013年7月 ⟶ 2014年6月

発行：公益財団法人プラン・ジャパン

## あの女の子たちは今「ベナン 養鶏プロジェクト」

2013 年度にご支援をいただいた西アフリカ・ベナンでの養鶏プロジェクト。
2013 年 9 月と 2014 年 6 月の 2 回にわたってベナンを訪れた
プログラム部の馬野マネジャーが“女の子たちの今”をお伝えします。

**実施期間●** 2012 年 7 月～ 2013 年 6 月
**実施地域●**クッフォ県、アタコラ県
**対象●**女の子 150 人

# 養鶏を通して収入を得たことが まわりの意識を変え、女の子の意識を変えた

**馬野裕朗 職員（プログラム部 マネジャー）**

グベイエジ村でプラン・ベナンの担当者から説明を聞く馬野マネジャー

**実施した主な活動**

- 養鶏に関する基本トレーニング（150人）
- 鶏舎設置と家禽の支給（150人、1,650羽）
- 預金貸付協同組合の立ち上げ（15グループ）
- リーダーシップトレーニング（150人）

## 「女の子の自立をサポート」するというチャレンジ

餌をやるマリーさん。鶏舎の壁には消毒の時期などさまざまな記録が記されている

このプロジェクトは、貧しい家庭の 20 歳以下の女の子たちに「養鶏指導を通して、女の子の経済的自立を目指し、自らの力で生活を切り開き、自分の可能性を広げる」ことをサポートするものです。

昨年 2013 年 9 月、初めてプロジェクト対象地域であるクッフォ県グベイエジ村を訪れました。あらかじめ現地担当者からは、以下のような話を聞きました。「親、地域の人々が女の子たちに敬意を払わない」「対象の女の子は学校へ行く機会がほとんどなかった、あるいは中途退学 ➡『早すぎる結婚・出産』が多い」「親の意識を変えるのは簡単ではない」。女の子たちには自己決定権がなく、家族や周りの指示に委ねるしかない状況です。

このときは、養鶏のトレーニングを受けたあとで、彼女たちは学んだマニュアルに則りながら、支給された鶏が死なないように夢中になって一生懸命育てていました。目に見える成果にやる気を出している様子が伺えましたが、まだ販売には至っていませんでした。平行して女の子 10 名が預金貸付協同組合を結成。定期的に集まり少額ながら預金し、その運用によって試行錯誤しながら小さな商売を行っていました。

そして、初めての訪問から 9 カ月後の 2014 年 6 月、再びグベイエジ村を訪れました。この村の女の子 10 名のリーダーをしているマリーさん（仮名）と再会。前回の訪問からの進展を語ってくれました。

「本格的な鶏の販売は、ようやく今年の 4 月にスタートできました。鶏は平均一羽 2,000CFA（約400円）前後で売れます。4 月からの約 3 カ月で 16,000 CFA（約 3,200 円）が収入になりました」

「預金貸付協同組合では、2 週間に一度会合を開いています。私たちは、ここにお金を預けるだけではなく、お金を借りてさまざまな商売をしています」

鶏の飼育・販売とともに、預金貯蓄組合の運用による商売からの収入も、大きな収入源となっていました。

家族全員が、マリーさんの養鶏・販売を助けている。この大きな鶏舎も両親のサポートで作られた

## 女の子の自尊心は、まわりの変化から着実に育まれた

「自分を大事に思えるようになった！」。この言葉がマリーさんの口から出たとき、衝撃を受けるとともに、このプロジェクトの成果やインパクトが少しずつ出始めていることを感じました。

衝撃を受けたのは、このプロジェクトが始まる前は、冒頭に書いたように、彼女たちの意思・希望は尊重されず、まわりの命令に委ねる生き方をせざるを得なかった。それが読み取れたからです。

一方で、このプロジェクトが、生き方に対しての新しい視点を彼女たちに与えることができたのではと感じました。つまり自尊心をもつこと、自分の意思を表明すること、なりたい自分を想像し、自分でそれを切り開くことができることを。

マリーさんは、彼女のまわりの変化についても話してくれました。「家族が私の活動をサポートしてくれます。私の意見を聞いてくれるようになりました。友だちや男の子、地域の大人たちも、自分たちの活動にとても関心をもち、注目してくれます。助言をくれたり、私たちに意見や指導を求めてくれるようになりました」。

女の子たちは、目の前にあることに一生懸命取り組んできた。鶏が大きくなる、ひよこがどんどん増える、いろいろな商売を開始する、などの目に見える成果が出て、収入が生まれている。それを見て、まわりが学びたいと思うようになり、彼女たちに相談したりする。その変化をいちばん感じているのは、彼女ら自身だと思います。

グベイエジ村の預金貸付協同組合の定期会合の様子。毎回、預金額と基金の運用状態が共有される

この「まわりの人たちの意識の変化」こそが、彼女たち自身の意識の変化、特に自尊心や自信を育むことに最も影響を与えたと感じます。

マリーさんを見ていると、これまでの流されるままだった人生から、自分で道を切り開いていくという生き方、それが実現できるという信念に変わる転換プロセスに今あるように感じます。まさに女の子のエンパワーメントを体現しつつあるのです。

**プロジェクトに参加した女の子たちの将来の夢**

- 「尊敬される立派な女性になりたい」
- 「小学校に復帰し、ちゃんと学業を修了させたい」
- 「生活に必要なものを買い家族のサポートしたい」
- 「もっと頑張って、養鶏の規模を大きくしたい」
- 「村の人たちに教えてあげたい」
- 「洋服店、髪結い店のようなアトリエを開きたい。自分の専門分野をもって働いていきたい」
- 「結婚して家族を持ち、家族を支えていきたい」

## パキスタン「女の子のための教育プロジェクト」

実施地域●ギルギット・バルティスタン州ディアメール郡
実施期間●2013 年 7 月～ 2014 年 6 月
対象● 5 歳から 10 歳の女の子約 1,300 人

アルファベットも書けるようになりました

# マドラサ（イスラム女子学校）に初めて国語や算数を導入

### 背景

パキスタンの辺境地域では女子教育の機会が閉ざされています。その結果、この地域の成人女性の識字率は男性の 30 %に対してわずか 2 %です。唯一の教育の場であるイスラム女子学校では国語や算数を学ぶ機会がありません。イスラム女子学校に政府が定めた基礎科目を導入し、女の子に公教育に準ずる教育の場を提供しました。

イスラム女子学校の授業風景

### 今期の主な活動

- 公教育カリキュラムの導入の教師採用とトレーニング（10 人）
- 学校運営委員会の設立とメンバーのトレーニング（10 校、20 人）
- 教室建設や給水施設の設置（10 校）
- 教科書の支給（算数 1,042 冊、ウルドゥー語 1,042 冊、英語 1,042 冊）
- 文房具や教室備品の支給

ディアメール郡で長年活動する唯一の団体で、すでに地域の人々との信頼関係を築いている地元のパートナー団体と連携しながらプロジェクトを実施。地域の慣習や文化、伝統、イスラム教の教えを尊重し、住民が最も信頼を寄せるイスラム学者や長老に意見を求めながら慎重に活動を進めました。

最初は外部の団体がマドラサの運営に介入することへの反発があり、諮問委員会の設立までに時間を要しましたが、イスラム学者と学校との話し合いを重ね、理解を得ることができました。女性教師 8 人と男性教師 2 人を新たに採用し、トレーニングを実施。2013 年 10 月からは 10 校で、週 18 時間、ウルドゥー語、算数、英語の授業を行いました。2014 年 3 月に州教育省基準の進級試験を行ったところ、約 7 割の児童が進級できました。

当初は反発もありましたが、現在は宗教指導者をはじめ、親も行政官もこのプロジェクトを高く評価しています。また、子どもたちも新しい教室で、新しい科目を楽しみながら学んでいます。

## Field Report ｜ 寺田聡子職員（プログラム部）

### 「A,B,C･･･」と唱える、自信に溢れた女の子たち

首都イスラマバードから車で約 10 時間かけて、ギルギット・バルティスタン州に到着しました。この風光明媚な地域は、国内外に観光地としても知られています。人々は公用語のウルドゥー語ではなく自分たちの民族のシナ語を話します。

学校に着くと、子どもたちは元気に私を迎えてくれました。外国人が来るのは珍しいことですが、恥ずかしがる様子はまったくなく、興味津々です。私が何か質問すると、英語からウルドゥー語、そしてシナ語の通訳が入りますが、大きな声ですぐに答えが返ってきます。自分が勉強している教科書を私に見せに来て、「よく勉強しているでしょ？」と得意気な笑顔を向けるのです。

実は、私が教室に入っていったとき、女性の先生の姿はありませんでした。私と同行したプラン職員とパートナー団体の職員が全員男性なので、女性の先生は姿を隠さなければならなかったのです。この地域では、10 ～ 12 歳ぐらいになると異性に接することは制限されます。そのため、私は一人で教室から少し離れた部屋で、女性の先生たちに会いました。地域の文化や風習を尊重しながらプロジェクトをすすめることの難しさを感じた出張でした。

子どもたちに勉強した教科書をみせてもらいました

## スーダン「女の子の早すぎる結婚対策プロジェクト」

実施地域●カッサラ州　15 コミュニティ
実施期間●2013 年 7 月～ 2014 年 6 月
対象●地域住民 88,100 人

啓発活動のリーダーとして養成された「女子教育クラブ」の女の子たち

# 地域全体で人々の意識を啓発し、早すぎる結婚の撲滅を目指す

### 背景

スーダンのカッサラ州では、早すぎる結婚の弊害についての住民の知識が乏しいため、早婚率が高く、深刻な問題となっています。結婚した女の子は家事労働に追われ、学校に通うことが難しく、経済的・社会的に自立をすることができません。本プロジェクトでは、対象地域の早婚率を下げるため、女の子の能力強化や住民への意識啓発活動などを行いました。

コミュニティのグループディスカッションに参加する女性たち

### 今期の主な活動

- 子ども保護グループの設立とトレーニング（10 委員会・50 人）
- 子ども保護グループによる地域住民への意識啓発活動（約 3,900 人）
- 「女子教育クラブ」の設立とトレーニング（10 クラブ・165 人）
- コミュニティリーダー及び地元政府へのトレーニング（105 人）
- ラジオでの意識啓発キャンペーン（20 回）、ポスター・パンフレットの配布（1,000 枚）
- 女性センターの建設開始（2014 年 12 月末終了予定）

カッサラ州では貧困や古くから続く慣習により、早すぎる結婚が深刻な問題になっています。早すぎる結婚を撲滅するため、地域のさまざまなレベルで意識啓発活動を行いました。まずは地域で影響力をもつ人々の意識を変えることが重要です。地域の有力者であるコミュニティリーダーや宗教指導者にアプローチし、早すぎる結婚の弊害についての理解を促しました。その結果、2 つのコミュニティリーダーが「早婚ゼロ」を目指すことを宣言。また、住民主導による啓発活動を行うため、各コミュニティで「子ども保護グループ」を設立し、子どもの保護の重要性や早すぎる結婚の弊害について伝えました。

女の子自身の能力強化にも力を入れました。学校に「女子教育クラブ」を設立し、啓発活動のリーダーとして養成。女の子が教育を受ける権利を訴えたほか、中途退学をした女の子の家庭を訪問し学校に戻るよう説得。12 人の女の子が学校に戻ってきました。

学校で実施された「女子教育クラブ」による啓発活動

### 参加者の声

**サウサンさん（14 才、女性）**

両親から、女の子が教育を受ける必要はないといわれ続けて育ちました。そのため、私は 10 歳のときに学校を辞めました。そんなある日、「女子教育クラブ」のメンバーが私の家を訪問し、私と両親に、女の子が教育を受ける重要性を訴えてくれました。今、私は学校に戻り、「女子教育クラブ」のメンバーとして活動しています。

## ミャンマー「安全な水を確保するプロジェクト」

実施地域●マンダレイ管区内ニャン・ウー県南部にあるクン・パ・ラー村
実施期間●2013 年 7 月～ 2014 年 6 月
対象●地域住民　約 650 人

水管理委員会へのトレーニングの様子

# 村人自身による主体的管理で、安全な水へのアクセス確保を目指す

### 背景

ミャンマーのこの地域は中央乾燥地帯と呼ばれ、降雨は 5 月から 10 月の雨季に集中、11 月以降の乾季は水不足が深刻です。乾季には近くの水源が涸れてしまうため、それ以降は、数キロ離れた井戸から水を運ばなければなりません。子どもと女性の役割である水汲みは、危険を伴う重労働です。さらに水に起因する下痢や赤痢が蔓延しています。

子どもたちに井戸や衛生知識について説明するプラン職員

### 今期の主な活動

●井戸の掘削（1 基）　●給水設備の設置：貯水槽と貯水タンク（1 校）
●井戸管理委員会への維持管理トレーニング（10 人）
●村人や教員・生徒への衛生トレーニング（教師 4 人、生徒 60 人）

クン・パ・ラー村の人たちが安全な水に簡単にアクセスできるように、このプロジェクトが実施されました。地質調査の結果、村から少し離れた地点で水源が見つかりました。そこに井戸を掘り、村の中心地と学校それぞれに貯水槽を建設し、井戸とパイプでつなぎました。それにより、130 世帯、約 650 人の住人に対して、一人が一日に必要な水の量（30 リットル）を供給することができるようになりました。

プロジェクトでは、この村に給水設備を設置するにあたり、持続的な利用環境を作ることを重視して、10 人の住民からなる井戸管理委員会を設立。彼らに井戸の運営管理のトレーニングを実施しました。

また、衛生に関する意識啓発の一環として、村人や学校の生徒に対して衛生トレーニングを行ないました。

給水設備設置にあたり、村の住人自身に多くの貢献をしてもらいました。たとえば、建設に必要な石や砂の提供、井戸建設やパイプの地下敷設などの労働サポートなどです。これらを通して村人の井戸へのオーナーシップが高まり、持続的な管理が促進されることが期待されています。

参加者の声　｜　ウー・ウィン　マウンさん（クン・パ・ラー村長）

## 水くみの負担から開放されました

井戸が完成した地域の村長の喜びの声が届きました。

「この村で井戸が完成するのを待ちわびていました。建設地の土地購入に当たっては、この村出身で今は首都のヤンゴンに住んでいる 2 人の村人がサポートしてくれました。

井戸建設中は、作業してくれる人に対して毎日食事を提供しました。建設のサポートをしましたが、問題はまったくありませんでした。水は少しすっぱいですが、一晩置けば問題なく飲めます。

クン・パ・ラー村では、井戸ができる前は隣村まで水を取りにいかなくてはいけませんでした。またリヤカーを借りたり、そこの水を購入したりで、50 ガロンの水のために 170 セントを支払わねばならず、また 1.6㎞離れているので、一往復で 30 分はかかります。それを何度も繰り返さねばなりませんでした。

今では、簡単に水が手に入ります。時間を節約でき、仕事に集中できます。学校で子どもたちが衛生知識を身につけてくれることを楽しみにしています。十分な量の安全な水が簡単に手に入るようになり、日本の支援者の皆さんに、本当に感謝しています」

ウー・ウィン マウンさん

## ベトナム「少数民族地域における教育改善プロジェクト」

実施地域●ハザン省、クアンビン省、クアンガイ省
実施期間● 2014 年 1 月～ 2014 年 12 月（予定）
対象●小学校児童約 7,000 人と教師約 600 人

クアンガイ省に建設された小学校（2 教室）

# 初めて手にする絵本と参加型授業で、苦手なベトナム語を克服

### 背景

ベトナムの都市部と農村部の格差は年々広がり、中でも少数民族が多く住む山岳地域は、国の発展から取り残されつつあります。教室が不足し、教育の質も低いままで、学校を卒業しても十分な知識を身につけることができません。公用語のベトナム語を話せないまま大きくなると、就業の機会も限られてしまいます。

支給された絵本を読む新 1 年生の子どもたち

### 今期の主な活動

●授業の質を改善するための教師トレーニング（615 人）
●小学校の教室建設および備品支給（2 校 5 教室）、図書と書棚の支給（110 校）
●トイレの設置（2 校）　●ベトナム語指導のための教員アシスタントの配置（6 人）
●地域の読み聞かせ会の開催（60 回）

小学校 2 校の教室とトイレが完成し、約 80 人の子どもの学習環境が改善しました。これまではトイレもなく、崖の横で壊れそうなトタン屋根の教室や、教室不足のために他の学年と同じ教室で学んでいた子どもたち。これからは安心して、勉強に集中することができます。

また、対象地域のすべての学校に、児童用図書を支給。ほとんどの子どもが絵本を持っていない地域で、1・2 年生の全教室（202 教室）に書棚を設置しました。カラフルな絵本は大人気で、夏休みの読み聞かせ会でも活用され、ベトナム語学習に役立っています。

対象地域の教師は、児童参加型授業や教材作成、ベトナム語指導など、年 6 回におよぶトレーニングに参加し、授業内容の改善に取り組んでいます。児童の授業への参加も増え、ベトナム語理解力も向上しつつあります。

※このプロジェクトは、外務省（NGO 連携無償資金協力）と協働し、実施しています。

Field Report　｜　船越美奈 職員（プログラム部）

## 少数民族の親たちが、子どもの将来に願うこと

このプロジェクトの責任者として、ベトナムに赴任してから 1 年半以上が経ちました。対象地域はどこも険しい山道を超えた先にあり、車で 10 時間以上かかる地域もあります。アクセスの難しさ、そしてベトナム語をほとんど話せないという状況の中、住民の多くは貧困から抜け出せずにいます。多くの子どもが小学校に通うようになった今でも、授業についていけないための留年や、卒業しても読み書きができないといった問題がまだまだあります。

「子どもには学校で、ベトナム語をしっかり学んでほしい。そしていつか、自分でやりたい仕事に就けるようになってほしい」。多くの親から、この言葉を聞きました。自分自身は教育を受けられず、過酷な環境下で農業を行う以外、人生の選択肢がなかった親たち。子どもには同じ思いをさせまいと、教室建設の土地提供や土地整備、教育推進のための資金提供（米で支払い）など、できる限りの協力をしています。

プロジェクトでは、地域の親や教師とともに、教室・トイレ建設や図書支給、教師トレーニングなどに取り組んでいます。長年にわたってベトナムの教育を支援する、日本人コンサルタントの方々にもご協力いただいています。対象地域の授業では、グループ学習やペア学習が増えるなど少しずつ変化が見えてきました。子どもたちが質の高い教育を受け、可能性を伸ばせる環境をつくるため、2015 年もプロジェクトを継続します。引き続きご協力をお願いいたします。

支援対象校に通うハモン族の女の子たちとともに

## モザンビーク「母子の命を守るプロジェクト」

実施地域●イニャンバネ州ジャンガモ郡マッサヴァナ村
実施期間●2013 年 7 月～ 2014 年 6 月
対象●妊産婦を含む女性約 2,700 人と乳幼児約 3,100 人

出産と妊娠期の栄養に関する冊子を受け取った妊婦

# 保健所に母子保健サービス棟が完成し、安全な出産が可能に

**背景**

モザンビークの農村地域では緊急産科を備えた病院が遠いうえ、地域の保健所が十分に機能せず、緊急時の対応が遅れ、妊産婦が死亡するケースがみられます。このプロジェクトでは、村の保健所に初めての出産待機施設を設置し、保健所職員などの能力強化を図ることで、妊産婦と新生児へ適切な医療サービスを提供できる体制を整えました。

**今期の主な活動**

●母子保健サービス棟の建設と備品の支給　●看護師や伝統的助産師の能力強化（27 人）
●乳幼児へのビタミン A 剤と抗寄生虫薬の支給（3,058 人）　●母子保健に関する知識普及冊子の作成（2,000 部）　●緊急産科対応のための照会システムの構築

今期はジャンガモ郡マッサヴァナ村保健所にシャワーやトイレ、キッチン付きの母子保健サービス棟が完成。施設の建設には地域住民が協力し、今後の維持管理責任も担っていきます。

伝統的助産師 14 人と保健所に勤務する看護師 13 人は、産前・産後ケアや出産介助に関するトレーニングに参加。母子保健サービス棟ではこれまでに 467 人が看護師の介助を受けて出産しました。さらに保健所では、5 歳未満児にビタミン A 剤や抗寄生虫薬を支給しました。

また、出産と妊娠期の栄養に関する冊子を計 2,000 部作成し、配布。これらの活動を通して、対象地域の妊産婦と子どもたちの健康が改善されつつあります。

## カンボジア「小学校の給食支援プロジェクト」

実施地域●シェムリアップ州、バッタンバン州、カンポントム州、オドーミンチェイ州
実施期間●2013 年 10 月～ 2015 年 9 月
対象●629 校に通う全児童、教師、児童の家族をはじめとした地域住民

みんな大好きな給食の時間。自然に笑顔がこぼれる

# シェムリアップでの経験を活かし、近隣地域にも学校給食を導入

**背景**

カンボジアの農村地域では、乏しい自給食糧に頼っており、十分な栄養が摂れません。子どもたちは空腹のために授業に集中できず、学業に深刻な影響が出ています。このプロジェクトでは学校給食や学校菜園の導入、大人への栄養指導や奨学金などを通じ、就学率の向上、退学率の低下を目指しました。

**今期の主な活動**

●学校給食の実施（629 校）●貧困家庭への米・奨学金の支給（児童 5,915 人）
●学校菜園、家庭菜園の促進（全対象校）　●地元農家グループと食材調達について協議
●新しく学校給食を始める地域担当スタッフの採用、トレーニング（17 人）

昨秋プラン・ジャパンが支援したシェムリアップ州での毎朝の給食は、地域に定着し、たくさんの子どもたちに力を与えています。今期は近隣の貧困 3 州に拡大して活動を開始。トレーニングを受けたスタッフが、新規 3 州の対象校をまわり、調理や食材管理のしかたを指導。並行して地元農家と話し合いを始めました。これは現在、国連世界食糧計画（WFP）から提供されている給食の食材（米、豆、イワシ缶詰など）を少しずつ地元産のものに変えていく仕組みを作るためです。地元農家の収入が上がれば子どもの給食費を払えるようになり、学校は給食を続けられます。支援からの卒業にはまだ時間がかかりますが、その一歩が始まっています。

## ガーナ「乳幼児の栄養改善プロジェクト」

実施地域●アッパー・ウエスト州ワ西地区 16 コミュニティ
実施期間●2013 年 7 月～ 2014 年 6 月
対象●地域住民 1,870 人

ベスト・マザー賞を受賞した女性

# 井戸建設から料理教室まで、多岐にわたる活動を展開

**背景**

ガーナでは過去の干ばつによる食糧不足が深刻で、多くの子どもに貧血や発育不良などがみられます。小規模農業・畜産による食料生産支援をはじめ、地域の人々への栄養指導、安全な水の支給などを通じて、特に 2 歳未満児と母親の栄養状態の改善を目指しました。

野菜の苗の手入れをする女性

**今期の主な活動**

●家庭菜園・畜産による食料生産支援（450 世帯）
●保健ボランティアのトレーニング（104 人）
●6 カ月から 5 歳の乳幼児の栄養状態の調査（1,459 人）
●地域の人々への栄養教育と意識啓発（2,130 人）
●井戸の建設（4 基）

子どもの栄養状態の改善のために、6 カ月までの完全母乳育児と 2 歳までの補完栄養食について、母親たちに説明することから始めました。地域の母親支援グループは、地元の食材を使った補完栄養食の作り方をデモンストレーションし、さらに参加者の料理コンテストが行われ、最も理想的とされる料理を作った女性 10 人には「ベスト・マザー賞」が送られました。参加者のなかには少数ながら男性もいました。

対象世帯には、ビタミンやミネラルを多く含むキュウリ、カボチャ、レタス、キャベツ、トマトなどの野菜やスイカなどの果物の種子を支給し、生産を支援しています。

また、トレーニングを受けた保健ボランティアが子どもたちの体重測定を実施。深刻な栄養不良状態の子どもを見つけ、集中的に栄養強化食を提供しました。さらに野菜の栽培や料理、畜産に欠かせない清潔な水を確保するために、手動ポンプ式井戸を建設し、石鹸による手洗いや衛生的な水の保管、家庭ごみの廃棄などに関する衛生教育も併せて行いました。

**Field Report**　楠祐子職員（ファンドレイジング部）

## 子どもの栄養に気を配るガーナのお母さんたち

ガーナ最北端のアッパー・ウエスト州は、首都アクラから飛行機で 1 時間、さらに車で 5 時間のところにあります。私は、子育て中の母親を中心とした村落貯蓄貸付組合メンバーの女性たちに会いました。「子どもに少しでも栄養価の高い食事を与え、学校へ行かせたい」とお母さんたちは一生懸命に働いていました。自分が栽培した収穫物を販売したり、さらには製粉や調理などの手を加えることで、収穫物に付加価値をつけて販売している人も。

彼女たちに、ふだんの食事について聞いてみました。モロコシ、トマト、雑穀のミレット、ヤム芋、モリンガ（植物の一種）、大豆、小さな魚、ダワダワ…。「ダワダワ」とは何でしょうか？　調味料（スパイス）として使用したり、食事や菓子の原材料にもなる、栄養価の高い西アフリカの伝統食品とのこと。

このプロジェクトで料理指導を行った女性の家に行き、ダワダワ作りを見せてもらいました。「材料の豆を黒くなるまで蒸してつぶして、丸めて発酵させるの。ほ～ら、匂いをかいでみて」。見た目は日本の味噌玉に似ており発酵臭がしました。

ガーナの職員と一緒に

地産地消が当然のガーナ最北端の地で、子どもたちが健やかに成長できるよう、お母さんたちの努力は今日も続いています。

## フィリピン「台風30号（ハイエン）」

対象地域 ● サマール島東部と西部、レイテ島、セブ島、ミンドロ島、マスバテ島

# 必要な物資を届けつつ、子どもの保護と心のケアに注力

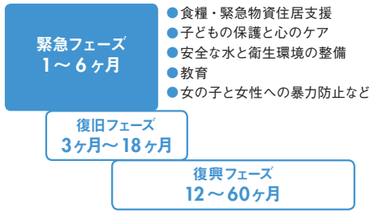
被災直後の様子（レイテ島）

### 背景

2013年11月8日にフィリピン台風ハイエン（地元ではヨランダ）が上陸。歴史上最も大きく、時速270キロメートル、最大で時速312キロメートルの強風、および7メートルの高潮が地域を襲いました。この台風によりフィリピンの9地域で、500万人の子どもを含む1,500万人が被災し、家を失った人は約400万人、亡くなった人は6,000人にのぼりました。

### 今期の主な活動

- 食糧の提供（39万5,000人分）
- 仮設住宅（シェルター）キット提供（13万8,000個）
- 「子どもにやさしいスペース」開設（101カ所）
- 給水キット9万5,000個（安全で清潔な水）
- 通学キット6,100個
- 遊び、学習、心のケアのための支援（子ども2万人）
- 女の子や女性への暴力を防ぐため、女性専用のスペース設置（400人）
- 被災地域の再建にかかる仕事に被災者を雇用して、現金を支給するキャッシュ・フォー・ワークプロジェクト（1万6,000世帯）
- 困窮する状況にある世帯への緊急措置として、無条件の現金支給による支援（約2,000世帯）




被災後の支援は、上記の3段階に分類されます。ここでは緊急フェーズでの活動をご報告しています

プランは、「災害が襲うとき、常に大きな打撃を受けるのは弱い立場の人々、特に子どもたちである」という立場から、子どもの保護を中心に活動を進めました。プラン・フィリピンの緊急支援チームは、被災地での被害状況の把握と子どもの保護を最優先に、保健、衛生、教育などで支援を続けています。これからも、5カ年にわたる復興支援計画を軸に、支援活動を続けていきます。

### 子どもの保護と心のケアのため 子どもにやさしいスペース開設

子どもたちの心のケアのため、仲間と遊び、安心して過ごすことのできる「子どもにやさしいスペース」を101カ所開設。12,580人の子どもたちが遊んだり、学んだり、心理社会的ケアを受けることができました。運営は、心理社会的ケアのトレーニングを受けたボランティアが担当。また、「国境なきピエロ団」と協力して、避難所、公共施設、子どもにやさしいスペース、学校などでピエロによるパフォーマンスを届けました。ピエロのパフォーマンスは、子どもたちに慰めと希望の回復をもたらします。

ピエロがやってきて大喜びの子どもたち

### 仮設の教室を建設 復学のため通学キットを支給

多くの学校が損壊したり、避難所になって学校として機能できないことから、幼稚園や小学校として利用できる仮設の教室を建て、備品や教材を支給しました。また、学校が残っていても、多くの子どもたちが教科書や文房具などを失ったことから、通学かばんや文房具などの「通学キット」を3歳から5歳の幼稚園児11,219人と6歳から15歳の子ども13,610人に配布し、学校で楽しく学べるように支援しました。また、学校を拠点にした衛生指導も行いました。

**被災者の声**

**クイーンさん（11歳の女の子）**

レイテ島に住む11歳のクイーンさんは、母親と「子どもにやさしいスペース」に来るのを楽しみにしています。彼女の自宅は倒壊し、学校も壊れてしまいました。「私は絵本を読んでもらったり、みんなでここで遊んでいると、不安や恐怖を忘れることができます。勉強だけではなくて、人と仲良くする方法や、病気にならないように手洗いをすることや、歯磨きの方法まで学ぶことができます。最近は、絵を描く方法を教えてもらいました。私は花や家を描くのがとても好きです」

## インド「インド洪水緊急復興支援」

対象地域 ● インド北部ウッタラカンド州ウッタルカシ県、ルドヤプラヤーグ県、チャモーリ県

# 避難所での炊き出しや離散家族の再会支援など被災直後からタイムリーに活動

毛布やソーラーライトを受け取る被災者

### 背景

2013年6月、ヒマラヤ巡礼で有名なインド北部は80年に1度という記録的な豪雨に見舞われました。6月16日には「ヒマラヤの津波」ともよばれる大規模な鉄砲水が発生。周辺住民や巡礼者などの死亡／行方不明者数は5,400人、広範囲にわたる土砂崩れによる集落の孤立などで4,200村以上が影響を受けました。

### 今期の主な活動

- 被災者の避難誘導と離散家族の再会支援
- 炊き出し支援：1日あたり350人を1か月で延べ10,500人
- 生活物資の配布：506世帯
- 食糧の配布：49世帯
- 被害を受けた子どもたちに対する心理ケア：105人　など

災害発生直後から現地行政などと連携して、濁流や土砂崩れに巻き込まれた人の捜索や、離れ離れになった家族の再会支援を実施。また、コミュニティボランティアが土地勘を生かして、集落に取り残された巡礼者を避難所や安全な場所へ誘導する支援も行いました。

その後も、避難所内外にて災害に巻き込まれた巡礼者や近隣住民への炊き出しや、孤立集落や家屋被害を受けた世帯に対するシェルターキット（ビニールシート、毛布、ソーラーライトなど）、衛生キット（タオル、生理用品、石鹸など）、調理キット（鍋や食器など）や食糧の配布を行いました。

**被災者の声**

**バンコリ村、ギータさん**

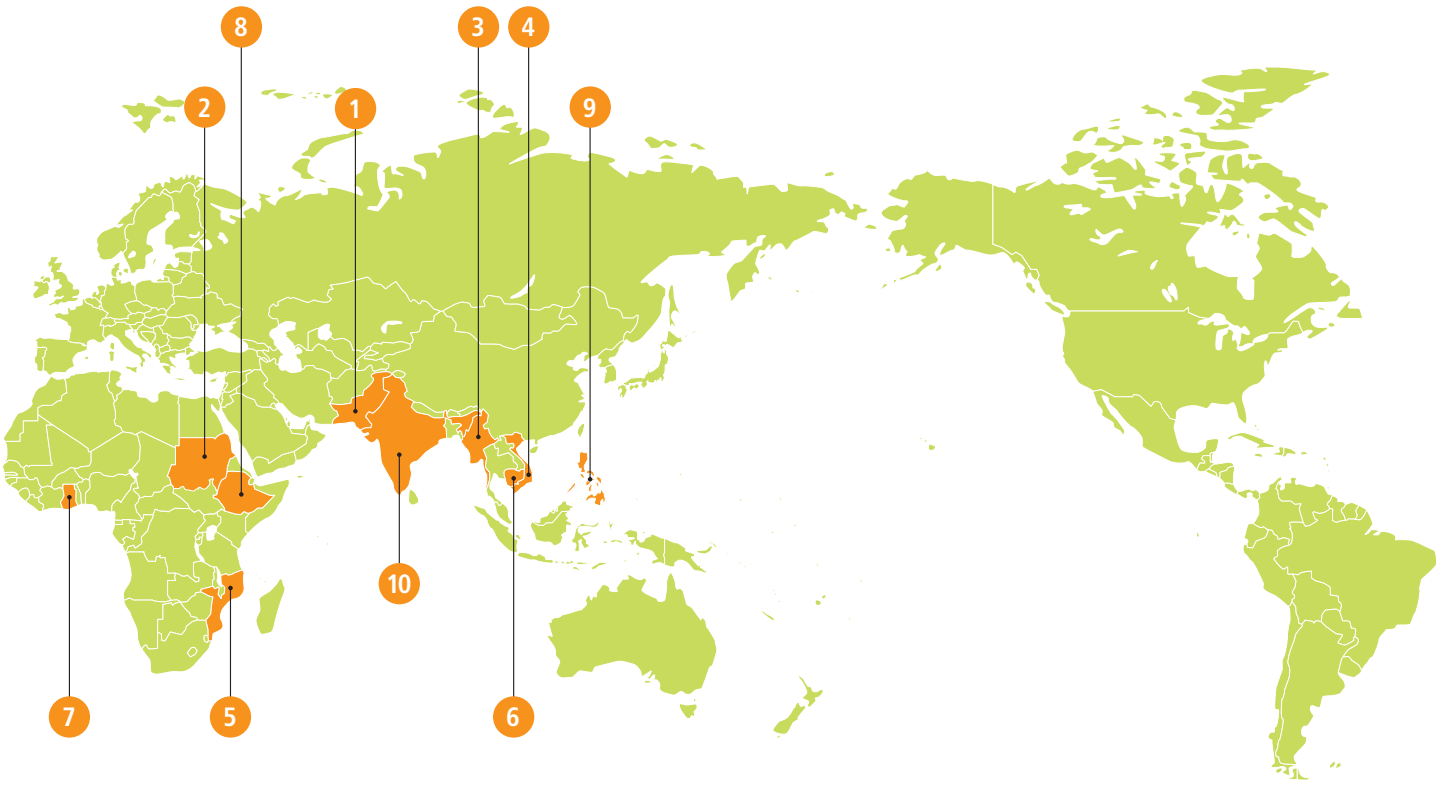
私たちの村と県の中心地を結ぶ道が土砂崩れで通れなくなり、村の食糧が尽きかけていました。その時の食糧などの支援には助けられました。

**アゴダ村、カマリさん**

この災害で私の家屋も被害がでました。プランが届けてくれた生活物資は、被災前の生活を取り戻すのにとても役に立ちました。ありがとうございました。

# プラン一般プロジェクト、緊急・復興支援収支

（2013年7月～2014年6月）
都度寄付件数：8,228件、Girl's Project継続支援者4,053人




（単位：円）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 収入 | 寄付金等（収入合計） | | | 217,206,869 | ※1 |
| | カテゴリー | 国 | プロジェクト名 | | |
| 支出 | 一般プロジェクト | 1 パキスタン | 女の子のための教育プロジェクト | 19,377,289 | |
| | | 2 スーダン | 女の子の早すぎる結婚対策プロジェクト | 18,481,937 | |
| | | 3 ミャンマー | 安全な水を確保するプロジェクト | 10,588,650 | |
| | | 4 ベトナム | 少数民族地域における教育改善プロジェクト | 9,111,665 | |
| | | 5 モザンビーク | 母子の命を守る保健改善プロジェクト | 7,374,229 | |
| | | 6 カンボジア | 小学校の給食支援プロジェクト | 11,818,329 | |
| | | 7 ガーナ | 乳幼児の栄養改善プロジェクト | 7,638,826 | |
| | | 8 エチオピア | 女の子のマラソン大会プロジェクト | 5,465,520 | ※2 |
| | | 9 フィリピン | 保健サービス向上プロジェクト | 58,907 | |
| | 緊急・復興支援 | 9 フィリピン | 台風 30 号（ハイエン）緊急・復興支援 | 26,411,922 | |
| | | 10 インド | インド・ウッタラーカンド州洪水 | 2,874,772 | |
| | 日本国内活動費用 | | | 46,425,983 | |
| | 支出合計 | | | 165,628,029 | |

| | | |
|---|---|---|
| 当期収支差額 | 51,578,840 | |
| 前期繰越収支差額 | 1,000,000 | ※3 |
| 次期繰越収支差額 | 52,578,840 | |

※1　収入には、寄付金の他、メモリアル・ファンド利息収益、遺贈信託財産取崩収入が含まれる。
※2　女の子のマラソン大会・学校スポーツ競技会を通じた女の子の能力開発と周囲への意識啓発。プラン特別プロジェクトと共同で実施した。
※3　前年度計上した次期繰越収支差額 12,189,410 円の内、11,189,410 円はマンスリー・サポーター・プロジェクト会計に振替を行い、本年度当該会計で実施するプロジェクトに使用した。

ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。


公益財団法人プラン・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100　FAX 03-5481-6200　www.plan-japan.org


Plan プラン・ジャパン